

現地からの声

第1次MINUSTAH司令部要員

施設幕僚 3等陸佐 竹内 規高

1 ハイチ入国

航空自衛隊のC-130輸送機から日本の裏側に降り立ったのは、地震から1ヶ月近くが経過した平成22年2月24日。空港に立った瞬間、息も出来ないくらいの熱気が自分を包み込んだ。と同時に、7年前に勤務した東ティモールを思い出した。簡素すぎる国際空港、むせる程の熱気、そして何とも言えない匂い。人間の体というものは、頭では忘れかけていた7年前の記憶でもしっかりと覚えているものなんだなあ、と妙に感心した。

しかし市内の様子は東ティモールのそれとは全く異なっていた。活気あふれるマーケット、想像を超える大量の車やバイク。かつてTVで見たアフリカの一都市を思わせるその様子に目を丸くしながら、迎えの車両に乗り込んだ。そして市内には未だ倒壊したまま建造物群が……。それら多くは発災後1ヶ月たった当時でも道路にせり出していた。「こんな所で工兵作業をするなんて、一体どれだけの所要があるのだろう。」と身震いしたのを今でも覚えている。

そんな市内を車窓から眺めながら、途中交通事故に巻き込まれるという洗礼も受けつつ、宿泊所へ何とか移動。まずは宿営準備だった。初日からクタクタだった。



(活気あふれる市内マーケット)



(倒壊したままの建造物)

2 司令部での業務

司令部での業務は、一言でいうと「目から鱗」の毎日だ。日本では幕僚（スタッフ）が検討したものを上司に意見具申し、OKをもらってスタートという仕事が一般的だ。所謂「ボトムアップ」。国連はその全くの逆「トップダウン」方式なのである。自分は日本隊との調整を主な仕事にしていたが、日本隊と綿密に打ち合わせた仕事をひっくり返されて、挙げ句突然新しい仕事を振られる事もしばしば。日本隊には迷惑をかけたが、これが国連平和維持隊の業務である。

司令部での業務のもう1つの大きな特徴は、やはり「多国籍・多文化」であろう。当然、平和

維持隊にも多くの国の軍人が参加しているが、私の部署は文民との調整に立つことも多く、日々「異文化」との接触がある。当初の1ヶ月は、(おとなしい一般的な日本人にとっては) 半ば強引な文民サイドからの調整に悩まされたりもしたが、次第にこれが心地良くなってきた。率直に意見をぶつけ合う環境は、よくよく考えれば非常に合理的だからである。ましてや自分の意見を主張することが求められる国際社会において、これは基本中の基本である。日本隊相手にこれをするとなんか売ることになる(実際、しばしばケンカした)のだが、司令部での業務はこれが出来ないと話にならない。

ただし、時間には極めてルーズだ。時間通りに会議が始まることは殆どないし、参加者が間に合わないどころか来ないことすらある。当初はそんなことにもいちいち怒っていた私であったが、着任後1ヶ月程で怒ることはやめた。精神衛生上よろしくないということが、分かったからだ。



(国際色豊かな同僚達：左から2番目が筆者)



(日本隊等との現地偵察：右から3番目が筆者)

3 ハイチへの想い

アフリカを知っている人に言わせれば、ここはまさに「アフリカ」だそうだ。私はアフリカに行ったことがないのでピンとこないが、確かに色彩豊かな乗り合いバスや人々の服装、頭に大きなカゴを乗せて歩く人々を見るにつけ、いつかTVで見たアフリカの光景そのものなのかもしれない。ハイチの歴史を紐解けば、ハイチの人々がアフリカにルーツを持つことは自明なのだが、既に5ヶ月弱滞在している私でも、ハイチのことは未だによく分からないことだらけだ。日本という先進国で何不自由なく過ごしてきた私にとって、ここでの物事は全てが新しい発見であり、驚きだからである。

ただハッキリ言えることは、この国の人々はみんな必死で1日1日を生きていることであり、きっと苦しいであろう現状にも関わらず笑顔を絶やさない、ということである。非常にゴミゴミとした雑踏の中でも、彼らの多くは笑顔で楽しそうにしている。汗を流しながら重い荷物を運ぶ時も、暑い中ハエを追い払いながら1日中野菜を売る時も、彼らは笑顔。楽しそうに友人・家族

と話している。

1日1日を分(秒?)単位で生きている日本人にとって、この国のノンビリさは到底理解できないが、私にはその笑顔の理由も未だに理解できない。しかし、その笑顔から何かを教えられている自分がいることも事実だ。ただひたすらに勤勉に働くことを善しとする我々にとって、その笑顔から考えさせられることは多い。彼らの屈託のない心底からの笑顔を忘れることはないだろう。

きっとこのノンビリさが、この国の復興が思うように進まない理由の1つなのだろう。しかし、その笑顔を生む風土があるからこそ、震災後6ヶ月を経てもなお復興が大きく進んでいないハイチで力強く生活できているのも事実だ。

あまりノンビリさに「イラッ」とすることも多いこの国ではあるが、そんな陽気な彼らの将来のために何か出来ればと、残り約2ヶ月弱の任務に自分を奮い立たせる今日この頃である。



(IDPキャンプ偵察：みんなカメラ目線)



(政府との直接対話)

ポルトープランスの市内の宿泊場所「キナム・ホテル」にて
平成22年7月18日(日) 21:00